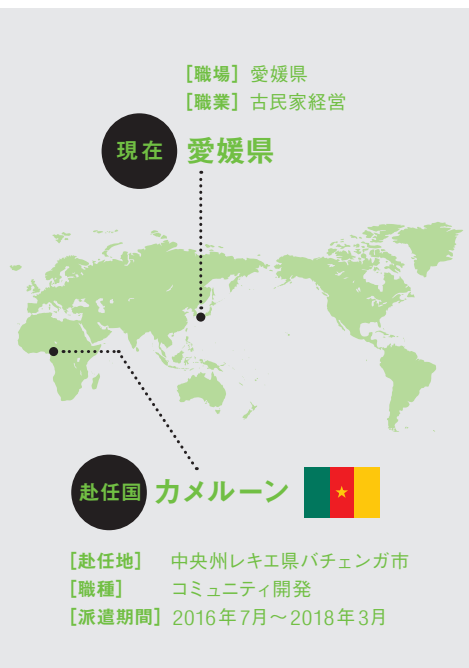




「セラヴィ」が導いた自由な生き方—— 愛媛で育む手づくりの暮らし

久場 勝弘さん 古民家民宿「カルフル」経営
Katsuhiko Kuba

地方公務員からJICA海外協力隊へ飛び込み、カメルーンでの経験を通じて、
それまでの価値観を大きく変えた久場勝弘さん。

現在は愛媛・西予の古民家を拠点に多彩な活動を展開しながら、再び世界を舞台に挑戦する未来を描く。

ゲストハウスの経営やものづくり、地域活動など多彩な顔をもつ久場さん。JICA海外協力隊（JOCV）と地域おこし協力隊の二つの協力隊経験を経て、自らの時間を自らで決める「自由な生き方」へと舵を切った。

久場さんの現在地

西予の古民家から広がる、
あくなき挑戦

愛媛県西予市ののどかな田園風景の中に、久場さんの暮らしと活動の拠点がある。5年前に地域おこし協力隊として赴任し、3年間の活動を経て、現在は古民家民宿「カルフル」を中心に多彩な活動を展開している。

「カルフル」は地域おこし協力隊時代に担っていた空き家利活用のミッションの一環として、自ら住んでいた広い古民家を改修して立ち上げた。フランス語で「交差点」を意味する名のとおり、多様な人々が出会い、新しい方向性を見いだす場所になってほしいという願いが込められている。

久場さんの活動はゲストハウス経営にとどまらない。カメルーンから持ち帰ったアフリカ布でバッグや服を制作して販売し、地域の伝統行事である「わらぐろ（藁のモニュメント）」づくりや、住民の記憶をマップ化するインタビュー活動にも参加。さらに、自給用の米や野菜づくり、さらにはビール造りのコンセプト提案やカメルーン産コーヒーの焙煎

など、暮らしの延長線上にある「自分がやりたいこと」への挑戦を次々と形にしている。

「お金はなくても、できることが増えていくのが楽しい」

そう語る久場さんは、組織に縛られず、自分の時間をすべて自分の意志で使いながら、日々新しい挑戦を重ねて



現在の創作活動はすべて独学。JOCV時代にその原点がある



地域住民のニーズに基づき様々な活動に取り組んだ



ゲストハウスの一角を工房にして創作活動を行っている



ゲストハウスに展示されているJOCV時代の活動写真

いる。西予で実践しているのは、自分の手で作る豊かな暮らしだ。

JOCV時代

人生観を変えた 「セラヴィ(それが人生)」の精神

今の久場さんの生き方の原点にあるのは、JOCVで過ごしたカメルーンでの2年間だった。それまでは神戸市役所に勤務する公務員だったが、現職参加で飛び込んだ異国の地での経験が、価値観をガラリと変えた。

赴任当初、「ビビリ」だったという久場さん。言葉も文化も異なる環境で、特に印象深いのは副市長宅の離れで生活を共にすることになった7歳の少女との日々だ。彼女は副市長に保護されて暮らしており、日常的に久場さんの部屋を訪ねては「金をくれ、物をくれ」と要求してきた。不便な生活、人種の違いによる疎外感、そして絶え間ない要求、当初は部屋に閉じこもりたくなるほどの恐怖とストレスを感じていたという。

そんな彼を救ったのが、現地の人々がよく口にしていた「セラヴィ」という言葉だった。直訳すれば「それが人生さ」。思い通りにいかない状況も、ままならない現実も、まずは「そういうものだ」と受けとめる。その感覚に触れたことで、縮こまっていた心が少しずつほぐれていった。

活動面でも、最初は苦勞の連続だったが、相手を思いやる気持ちを差し入れなどの具体的な形にして伝えるなど、泥臭い信頼関係の構築に努めた結果、最

後には現地のチームと心をつなげて事業を動かせるようになった。言葉や肌の色が違っても、真剣な思いは伝わる。その実感と成功体験こそが、今の久場さんの自信と行動力の土台になっている。

未来へのビジョン

再び世界へ そして国際協力の現場へ

西予での暮らしを楽しみながらも、久場さんの視線は常に世界へ向いている。現在、自身の活動を「転換期」ととらえ、ゲストハウスの運営をより効率化しながら、発信や新しい挑戦に比重を移そうとしている。

次に見据えるのは、再び国際協力のフィールドに戻ることに。

「カメルーンでの活動には心残りがあ。今、自分でチャレンジしていることをお金に変える仕組みができれば、次は自分一人でもアフリカへ行き、現地の人たちと一緒にスモールビジネスを起点にした『場づくり』に挑戦したい」

久場勝弘さん プロフィール

長野県出身。自治体職員としてJOCVに現職参加。退職後、西予市の風景に魅了され、地域おこし協力隊として移住。協力隊として農業や加工品を通して地域の魅力発信を行う傍らで、古民家民宿「カルフル」を立ち上げた。現在はアフリカ布によるものづくりや地域活動、農業など「自由な生き方」を実践中。

その思いは「カルフル」を訪れる海外旅行者との交流を通じて、さらに大きくなっている。5～10年後にはアフリカなどの途上国で腰を据えた国際協力活動に再挑戦し、その先には世界中を飛び回り、多様な景色を見ながら暮らす未来も描く。愛媛の拠点は誰かに任せるなど形を変えながら継続させ、自身はより自由に、ボーダレスに活動を広げていく構想だ。

カメルーンで得た「セラヴィ」の精神を胸に、心が動く方向へ進み続ける久場さん。これからも自らの手で人生という名の道を切り拓いていこう。



カルフルには「交差点」の名に相応しく世界各地から人が集まる